

## IX 海外における研究活動

1. 東アフリカにおける調査活動
2. ケニヤ国における熱帯病の研究と診療
3. フィリピンにおけるコレラの研究
4. フィリピンにおけるマラリアの研究
5. 済州島におけるマレイ糸状虫症に関する日韓共同研究

### 1. 東アフリカにおける調査活動

昭和39年7月14日から同年10月31日まで約4ヶ月半、林薰講師は京都大学東アフリカ学術調査隊に参加し、隊員の健康問題と現地疾患の調査を目的とした。当時はウイルス学分野における装備は全くなく、ウイルス病の検索など行うすべもなかったので、現地住民間に症例を求め歩き、かつ自らの経験によるという甚だ原始的な調査であった。しかし、タンザニア、ウガンダ、ケニヤにおける末端の診療施設や中央都市の研究機関から多くの資料を得る一方現地政府との接触を保つという貴重な機会を得た。

昭和40年7月19日から同年11月9日まで約4ヶ月、片峰大助及び中林敏夫両教授、村上文也助教授、末永斂助手はタンザニア国においてキオンボニ島及びタンガニイカ湖畔の住民の寄生虫及び原虫疾患の浸淫状況を調査した。特にマラリア、住血吸虫、フィラリアの各疾患について今後の問題点を明らかにした。

昭和41年6月15日から昭和42年2月13日まで、福見秀雄教授、林、氏家両助教授、三舟、末永、原田の各助手及び二ツ木大学院学生は本格的にタンザニアにおけるウイルス性疾患の検索にいどんだ。冷却遠心機、超低温冷凍機その他の重装備をタンザニア国ムワンザ市（ビクトリア湖畔）にある東アフリカ医科学研究所に運び、同研究所で哺乳マウス及び組織培養法を用いてアルボウイルス及び呼吸器系ウイルスの分離と調査にかかった。この研究は長い年月をかけて、じっくり行うつもりであったが文部省科学研究費助成の打切りで僅かに1年で中止の止むなきに至った。しかし、短い調査期間にもかかわらず、コウモリの唾液腺から12株のブカラサコウモリウイルスを分離したり、アデノウイルスの分布を知り、媒介蚊の生態を明らかにするなど貴重な成績が得られ公表した。

### 2. ケニヤ国における熱帯病の研究と診療

昭和40年11月ケニヤ政府から日本政府へ医療協力の要請があり、我国外務省から長崎大学へ協力の申入れがあった。昭和41年3月9日、当大学医学部第2内科 原耕平講師、第2外科 金子満雄助手、太田絹枝、松武滋子両看護婦が長期出張し、ケニヤ国ナカル州立病院に勤務した。当時、我国からアフリカ諸国に向けられた医療協力の第1陣であって、派遣各専門家の苦心は方法論を越えたものであったが、1年半ないし2年の長期滞在中に我国の医療及び看護水準の高さを認識させると共に医療協力の基礎をきずいた功績は大きい。以来今日まで別項に掲げるよう

各専門家が派遣され、その献身的な努力によって医療協力の成果をあげると共に医療協力の内容にも大きな変化をもたらした。

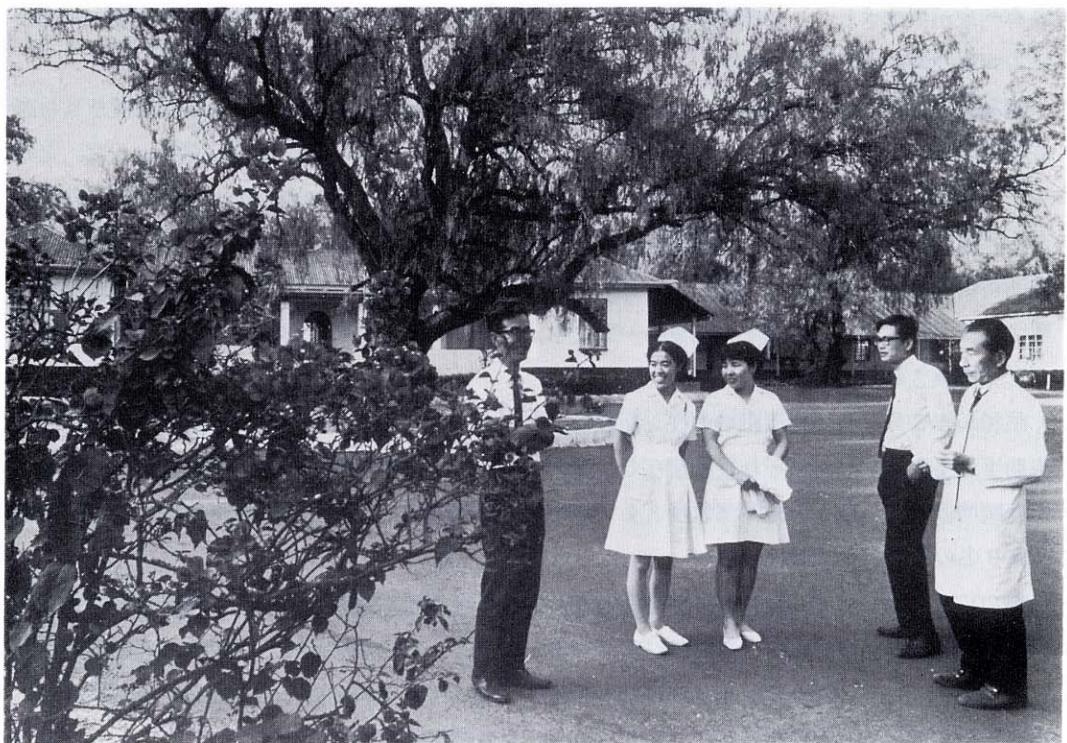
昭和44年6月26日から同年7月10日に至る間、福見秀雄所長を団長とした辻泰邦教授を含む調査団7名がケニア国を訪れケニア政府に対する医療協力に関する事項を検討し覚書とした。その中でナカル州立病院には臨床検査機関の整備が新たな要望として追加された。昭和45年11月22日から同年12月15日に至る間、篠島四郎教授を団長とし渡辺豊輔、林薰両教授及び海外技術協力事業団新垣和成氏の調査団が再度ケニア国を訪れ、臨床検査機関には病理学、生化学、細菌学を整備することにケニア政府側との意見の一致をみ、同時に熱帯医学研究所設立の要望が出され覚書として交換された。

昭和46年5月27日、所沢剛助教授（病理）、次いで同年9月1日、井上和義技官（細菌）、野村修助手（生化学）がそれぞれ長期滞在し、従来の診療体系に新風を注いだ。昭和47年9月14日、所沢剛助教授が秋田大学医学部教授として転出するに当って、渡辺豊輔教授がこれに替り派遣専門家9名の団長としての任務についた。

昭和47年11月12日から同月27日まで、国立公衆衛生院重松逸造部長、文部省原現吉科学官、海外技術協力事業団溝渕彰氏の調査団がケニア国を訪れ、ケニア国における日本側の医療協力について検討協議した。調査団とケニア政府との間に、ナカル州立病院における医療協力態勢は新たな形態で進められねばならぬこと、ナカルにおける熱帯医学研究所の設立についてケニア政府側の強い要望があることなどが確認され覚書とされた。

ケニア国ナカル州立病院への派遣専門家氏名、期間の一覧表

原 耕平	(第2内科)	昭和41年3月9日—昭和42年5月24日
金子 満雄	(第2外科)	〃 41年3月12日— 〃 43年4月11日
太田 絹枝	(看護婦)	〃 41年3月9日— 〃 43年12月3日
松武 滋子	(〃)	〃 41年3月9日— 〃 43年12月3日
石崎 駿	(第2内科)	〃 42年4月8日— 〃 44年6月15日
馬場 尚道	(第1外科)	〃 43年3月12日— 〃 44年6月15日
川良 玲子	(看護婦)	〃 43年11月22日— 〃 45年12月25日
堀 元子	(〃)	〃 43年11月22日— 〃 45年12月25日
田村 一則	(第2内科)	〃 44年5月28日— 〃 45年12月25日
田中 耕三	(第1外科)	〃 44年5月28日— 〃 45年3月31日
村上 文也	(熱研内科)	〃 45年11月1日— 〃 47年3月31日
西村 聖子	(看護婦)	〃 45年12月26日— 〃 47年11月28日
宮崎美知子	(〃)	〃 45年12月26日— 〃 47年11月28日
柴田紘一郎	(第1外科)	〃 46年3月8日— 〃 48年3月31日
所沢 剛	(熱研病理)	〃 46年5月27日— 〃 47年7月28日



村上文也、田中耕三、柴田絃一郎、西村聖子、宮崎美知子の派遣各専門家（ケニヤ、ナカル病院）



村上文也、田中耕三、柴田絃一郎、西村聖子、宮崎美知子の派遣各専門家（ケニヤ、ナカル病院）



西村聖子、宮崎美知子両婦長（昭和45年～昭和47年派遣）を囲んで談笑のひととき

西村聖子、宮崎美知子両婦長は、昭和45年～昭和47年にかけて、尼泊ルで医療活動を行った。西村は、昭和45年6月～昭和46年5月にかけて、尼泊ルの医療機関で研修を受けた。尼泊ルは、山岳地帯で、気候が変化しやすく、また、病気の種類も豊富である。西村は、主に、心臓病、肺結核、瘧疾などの治療に従事した。尼泊ルの医療環境は、まだ開拓途上であり、設備が整っていないところが多く、また、医療人材の不足も課題となっていた。西村は、この経験を通じて、世界中の医療状況や、人々の健康問題に対する理解を深めることができた。一方で、尼泊ルでの生活は、常に危険と隣り合わせであり、感染症や虫刺されなどのトラブルに見舞われることも多かった。しかし、西村は、この経験を糧として、より多くの人々の健康を守るために活動する意欲を抱くことになった。

南 宣行	(第2外科)	昭和46年5月27日－昭和48年6月26日
井上 和義	(中央検査部)	〃 46年9月1日－ 〃 47年10月3日
野村 修	(中央検査部)	〃 46年9月1日－ 〃 47年10月3日
木村昭二郎	(放射線科)	〃 46年12月13日－ 〃 48年3月31日
原田 尚紀	(熱研内科)	〃 47年3月5日－ 〃 49年3月8日
春田 純吾	(中央検査部)	〃 47年8月24日－ 〃 48年8月29日
一ノ瀬 博	(中央検査部)	〃 47年8月24日－ 〃 48年8月29日
中 英男	(熱研病理)	〃 47年6月15日－ 〃 48年3月31日
渡辺 豊輔	(熱研病理)	〃 47年9月14日－ 〃 48年3月31日
森 巍	(第2内科)	〃 48年3月15日－

### 3. フィリピンにおけるエルトールコレラの研究

エルトールコレラ日比 WHO 共同研究が昭和39年5月に発足し、福見所長は日本側委員長となり、またその委員の1人であった小張博士が昭和41年に臨床部門教授に就任したのに伴なって当研究所の研究課題の一つとなった。本研究は主として臨床部門と病理学部門が担当し、昭和45年度まで毎年マニラの San Lazaro 伝染病院において入院コレラ患者を対象に研究活動を行なった。その目的はコレラ症の臨床的観察を行ないつつ輸液療法と化学療法の指針を確立することと、コレラ症の病理を明らかにすることにあった。これに伴なう基礎的研究の一部は研究所内においても併行実施されたが、特に現地で得られた研究成果と派遣状況を以下に掲げる。

#### 臨床部門を中心とした研究成果

- 1) コレラ菌長期保菌者を見出し、それが極めて稀な胆嚢内保菌例であることを確認、その後毎年継続観察した。(小張: Bull. Wld Hlth Org., Vol 37. No. 5 および業績591)
- 2) コレラ患者につき血清および便中の電解質濃度を測定した結果、特に小児例で便中カリウム濃度が高いことを見出し、輸液療法を改善しさらにその効果を確認した。(小張: 業績608, 613, 632)
- 3) コレラ症の化学療法としてクロラムフェニコールを用いるに際して、経口よりも静脈内投与がより効果的であることを見出し、内服したクロラムフェニコールの一部不活化と、静脈内投与による便中濃度の高値を認めた。(小張: 業績592, 602, 613, 633, 岩永, 十亀, 小張: 551, 中富: 562, 小張, 十亀, 中富, 岩永, 宇都宮: 636)
- 4) クロラムフェニコール耐性コレラ菌の検出。(小張, 中富, 十亀: 業績625, 小張: 632, 小張, 十亀, 中富, 岩永, 宇都宮: 636)
- 5) ニトロフラン誘導体フララジンのコレラ症に対する有効性確認。(小張, 十亀, 中富, 岩永, 宇都宮: 業績636, 中富: 562)

#### 病理学部門を中心とした研究成果

- 1) コレラ患者の腸粘膜には組織学的に変化はないとの従来の学説を、新鮮材料の観察によって否定した。(渡辺: 業績604, 渡辺, 所沢: 606, 所沢, 渡辺: 607, 渡辺, 所沢, 関根, 国田:

## 9.2 東アフリカにおける研究活動

第2次世界大戦後、既述のように文部省は所轄研究所の統合や廃止を検討していく、風土病研究所もその対象となっていた。加えて、諫早水害等苦難の道を歩んでいたが、この苦境打開策として先ず研究業績を飛躍的に積み上げるために1959年（昭和34年）から研究所独自の機関誌を年4回発行することとし、更に大森所長に対する日本アフリカ学会初代会長でもあった長谷川秀治博士の助言により、京都大学アフリカ学術調査隊に参画することになったが、この事実は風土病研究所の活路の重要な一つになった。即ち、長谷川博士から今西錦司隊長への連絡もあり、この願いは受け入れられた。その結果、1964年（昭和39年）病理学部門林 薫講師が京大隊の一員として初めて東アフリカ各国へ調査に赴いた。翌1965年（昭和40年）には前年の林講師の調査結果を基盤として、熱研同門会や地元経済界からの援助をうけて風土病研究所独自の東アフリカ学術調査隊（隊長、片峰大助教授）が派遣され、タンザニア、ケニア、ウガンダの各国で寄生虫及び原虫疾患の調査、研究を行った。更に1966年（昭和41年）には文部省科学研究費の交付をうけて第2次東アフリカ学術調査隊（隊長、福見秀雄所長）が派遣され、ウイルス性

疾患、寄生虫疾患、及び媒介昆虫の調査が実施された。

一方、海外技術協力事業団—O T C A—（現在の国際協力事業団—J I C A—）の最初の事業として1966年（昭和41年）、ケニア国ナクルのリフトバレー州立病院への医療協力が開始され、最初に医学部から医師2名、看護婦2名が派遣された。以後1975年（昭和50年）までに34名が長崎大学から専門家として派遣されたが、その中8名は熱帯医学研究所からの派遣で、現地での感染症の研究と診療に従事した。

次いで1978年（昭和53年）から林 薫教授を中心とするケニア国伝染病対策プロジェクトがJ I C Aの事業の一環として開始され、下痢症及び寄生虫症について調査研究を行った。その基礎調査成績はケニア保健省及び州立衛生機関と日本側とによって、しばしば討議され、行政資料として活用された。続いて1984年（昭和59年）のケニア中央医学研究所（K E M R I）の設立については松本所長時代に研究所の総力をあげて取り組み、J I C A事業の顕著な成功例の一つとして知られている。目下のところ、同研究所との共同研究は寄生虫学部門を中心とした研究協力プロジェクトが続いている。



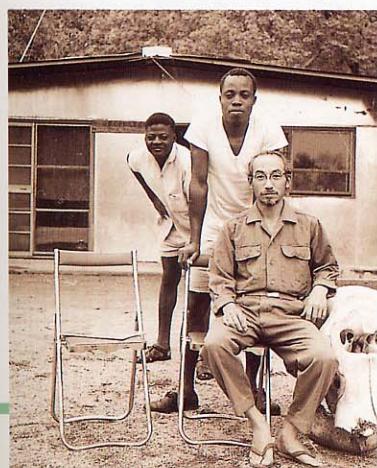
タンザニア国マハンガの診療所における林 薫講師と患者（昭和39年9月4日）

Dr. Kaoru Hayashi and his patients at the Mahanga Dispensary, Tanzania in 1964.



タンザニア国カラゴ部落で調査のひとときを過している林 薫講師（昭和39年9月9日）

Dr. Kaoru Hayashi resting at the Karago village, one of the field research spots, Tanzania in 1964.



タンザニア国ムクユ基地における林 薫講師と2人のポーター（昭和39年9月23日）

Dr. K. Hayashi and porters at the Mukuyu base, Tanzania in 1964.

## 9.2 Research and Cooperative Activities in East Africa

In 1964, Dr. Kaoru Hayashi visited East African countries as a member of the Kyoto University Scientific Research Team for Africa. Based on his report, a scientific research team for East Africa was organized by Professor Katamine of the institute and dispatched to Tanzania, Kenya and Uganda in 1965 to study parasitic and protozoan diseases. The second research team headed by Dean Hideo Fukumi was sent the following year. Since

Hideo Fukumi was sent the following year. Since

then, many staff members, particularly those of the departments of parasitology, pathology and clinical medicine in the institute, have contributed greatly to medical research and cooperation in this region with the support of the Ministry of Education, Science and Culture or by participating in the projects of the Japan International Cooperation Agency (JICA).

The newspaper clipping is from the Nippon Shimbun (長崎県版) dated December 11, 1966. The main headline reads "研究する 寄生虫を" (Researching Parasites). Below it, a large vertical headline reads "密林で寄生虫研究 原住民と食事を共に" (Parasite Research in the Forests with Indigenous People and Shared Meals). The article discusses the work of Nagasaki University's African Research Institute at the Leprarium in Tanzania. It includes a map of East Africa, a portrait of Dr. Tadao Okuda, and a photo of the institute's director, Dr. Tadao Okuda, standing next to a vehicle.

長崎大学東アフリカ学術調査隊についての新聞記事（昭和41年12月11日、西日本新聞）

A newspaper article on the Nagasaki University East Africa Scientific Research Team (Nishinihon Shinbun, Dec. 11, 1966)



長崎大学風土病研究所 東アフリカ学術調査隊壮行会  
(昭和40年7月1日、長崎グランドホテル)

The send-off party in honor of the East Africa Scientific Research Team, Research Institute of Endemics, Nagasaki University in 1965.



東アフリカ学術調査隊見送り（昭和40年7月14日、長崎駅）

Seeing the East Africa Scientific Research Team off at the Nagasaki railway station in 1965.

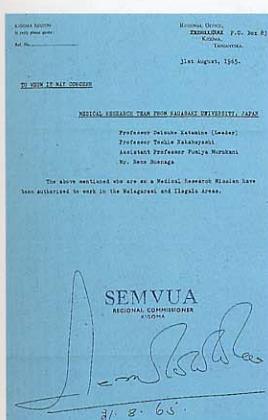
タンザニア国キオンボニ島における（片峰大助隊長）  
と部落民（昭和40年8月10日）

Members of the Nagasaki University East Africa Medical Research Team and villagers of Kiomboini Island, Tanzania in 1965.

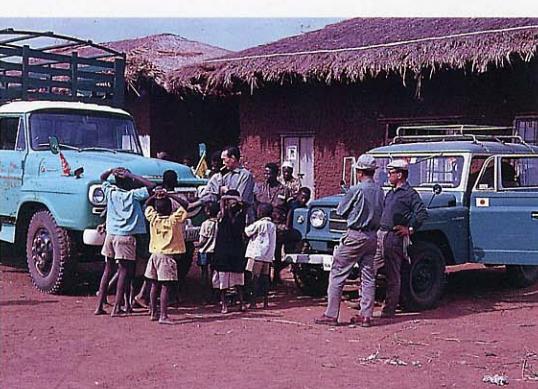


タンザニア国キゴマのゴールドライオンホテルで  
休息中の村上文也、片峰大助、末永 敏隊員  
(昭和40年9月18日、中林敏夫隊員写)

Members of the East Africa Scientific Research Team at the Gold Lion Hotel, Tanzania in 1965.



長崎大学学術調査隊員のマ  
ラガラシ及びイラガラ地域  
での医学調査を認めた坦  
ザニア国キゴマ州長官の許  
可証（昭和40年8月31日）  
The written permission for  
the members of Nagasaki  
University Medical Research  
Team to work in the  
Malagarasi and Ilagala  
areas, from the Kigoma  
Regional Commissioner,  
Tanzania in 1965.



タンザニア国イラガラ部落における学術調査隊  
員と野外調査用研究車（昭和40年9月17日）

Members of the Nagasaki University East Africa Medical Research Team and the car used for field surveys at Ilagala village, Tanzania in 1965.



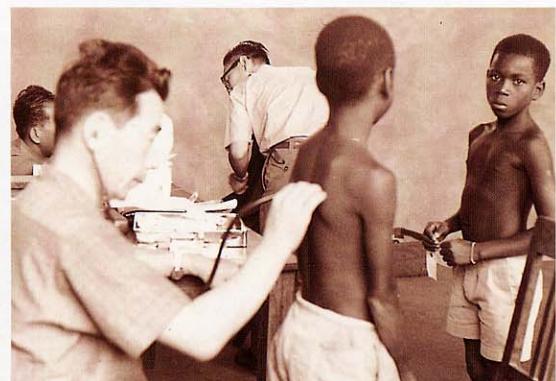
タンザニア国キゴマのゴールドライオンホテルで京大隊と情報交換中の長崎大学東アフリカ学術調査隊員（昭和45年9月）

Members of the Nagasaki University East Africa Medical Research Team and Kyoto University Africa Scientific Research Team at Kigoma Gold Lion Hotel, Tanzania in 1965.



タンザニア国キゴマの高等学校で高校生から採血中の中林敏夫、村上文也隊員（昭和40年9月）

Dr. T. Nakabayashi and Dr. F. Murakami collecting blood samples from high school students in Kigoma, Tanzania in 1965.



タンザニア国イラガラ小学校で診察中の村上文也隊員（昭和40年9月）

Dr. F. Murakami examining school children at Ilagala Elementary School, Tanzania in 1965.



タンザニア国イラガラ小学校で児童から採血中の末永 敏隊員（昭和40年9月）

Dr. O. Suenaga taking blood samples from school children at Ilagala Elementary School, Tanzania in 1965.



タンザニア国イラガラ診療所で診察中の片峰大助隊員（昭和40年9月）

Dr. D. Katamine examining a patient at the Ilagala Dispensary, Tanzania in 1965.



タンザニア国イラガラ診療所前に並んだ診療所スタッフ（2名）と学術調査隊員（4名）（昭和40年9月）

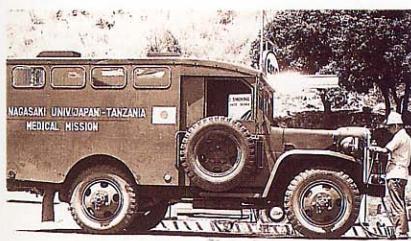
Members of the Nagasaki University East Africa Medical Research Team and staff of the Ilagala Dispensary at the front of the Dispensary, Tanzania in 1965.



タンザニア国キゴマの睡眠病流行地でツエツエバエを採集中の末永 敘隊員と現地案内人  
(昭和40年9月)

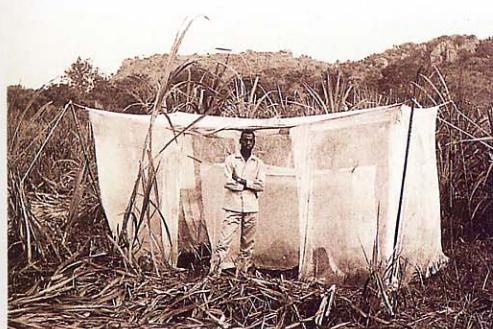
Dr. O. Suenaga collecting tsetse flies in the sleeping sickness endemic area of Kigoma, Tanzania in 1965.

昭和41年度長崎大学東アフリカ学術調査隊の基地となったタンザニア国ムワンザにある東アフリカ医学研究所（昭和42年1月20日）  
General view of the East Africa Medical Research Institute in Mwanza, Tanzania, the base of the Nagasaki University East Africa Medical Research Team in 1966-1967.



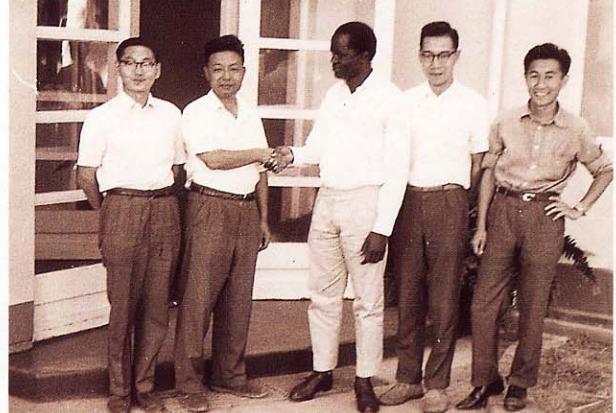
日産自動車株式会社から長崎大学東アフリカ学術調査隊へ無償貸与された野外調査用自動車（昭和42年1月）

The car used for field surveys in Tanzania by Nagasaki University East Africa Medical Research Team in 1966-1967.



タンザニア国ビクトリア湖畔のスワンプ地帯に張った蚊採集のための二重蚊帳と実験補助者ゴッドフレイ君（昭和41年11月、末永隊員写す）

The human bait trap for mosquito collection set up near a lake side swamp at Lake Victoria, Tanzania, and an assistant worker, Mr. L. Godfrey (November 1966).



氏家淳雄隊員の東アフリカ医学研究所到着を玄関に出迎えたイヤクゼ所長と三舟求真人、末永 敘、ニツ木浩一隊員（昭和41年11月28日）

Dr. A. Ujije was met by the director, Dr. V.M. Eyakaze of the East Africa Medical Research Institute and 3 members of the Nagasaki University East Africa Medical Research Team at the entrance of the institute on November 28, 1966.